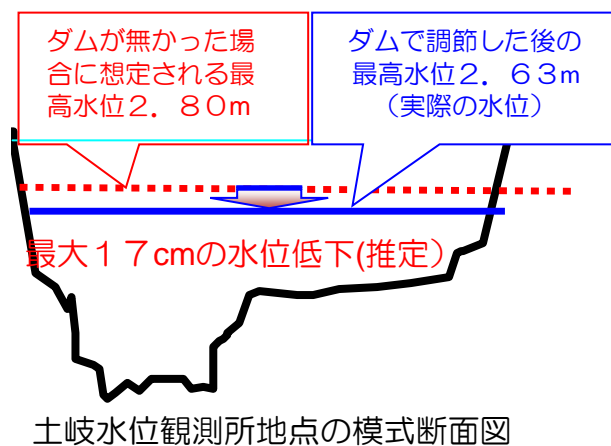
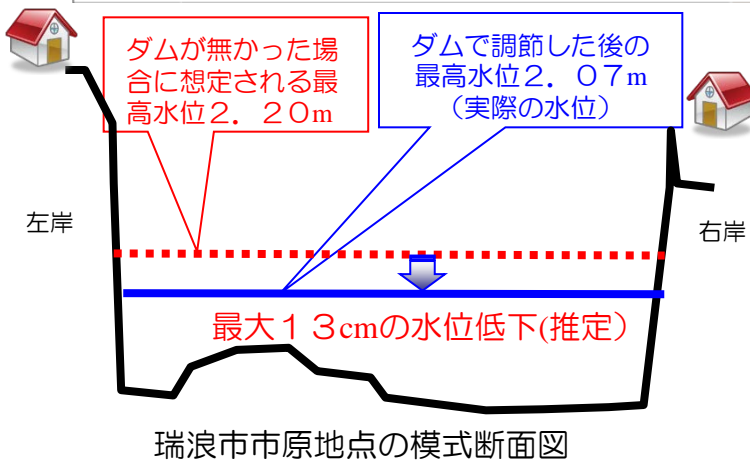
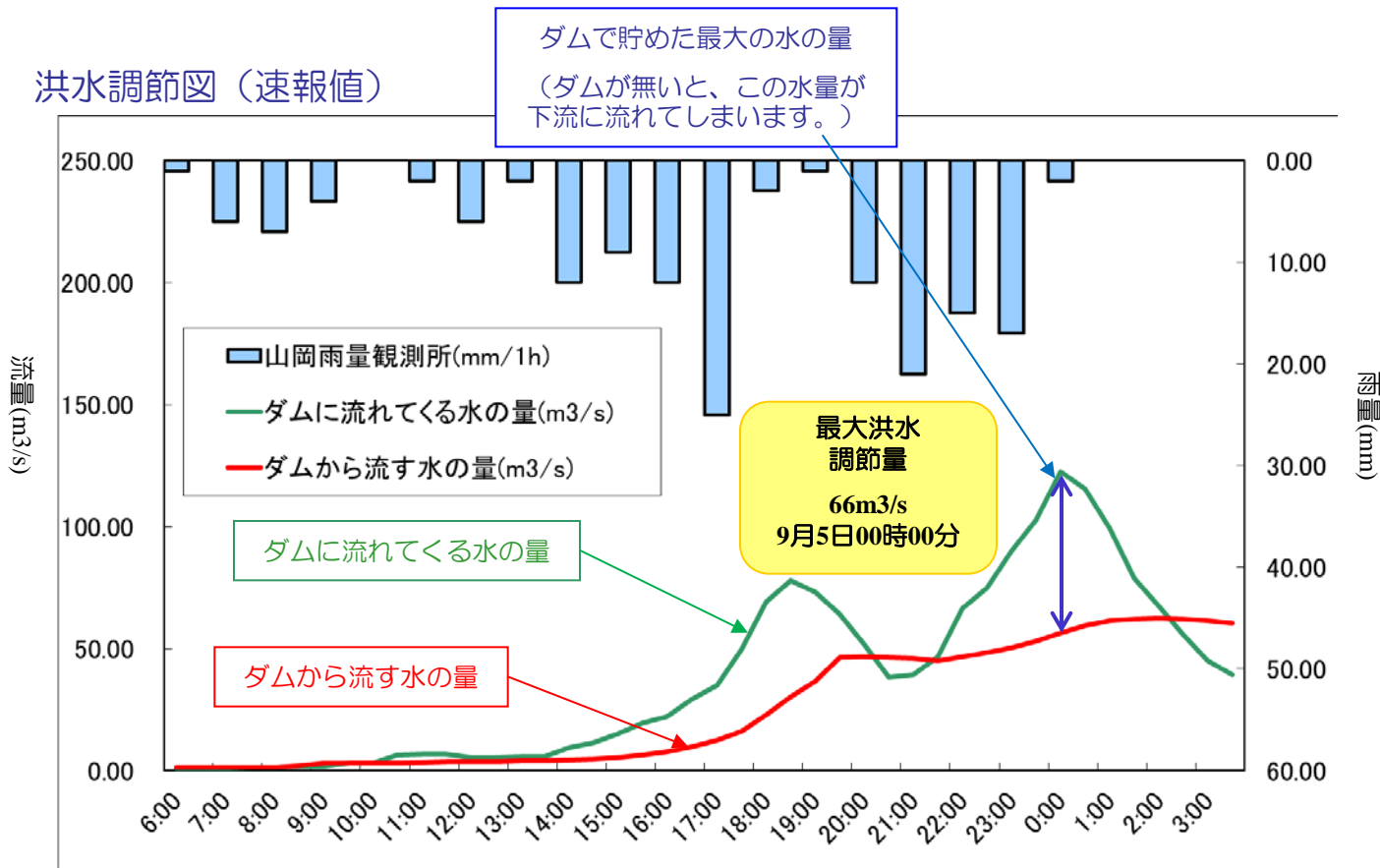


～小里川ダムの防災操作による河川水位の低減効果～

～1,089千 m^3 の水をダム湖に貯め、洪水を調節し、下流の被害を防ぎました～

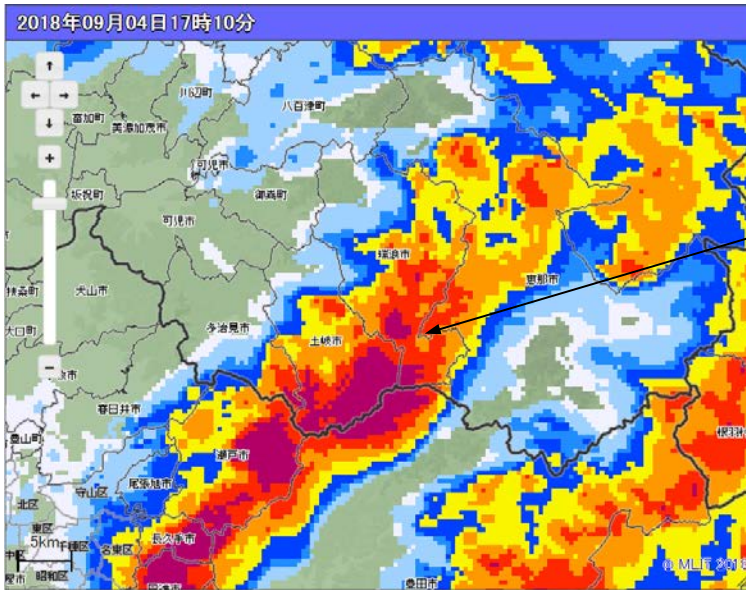
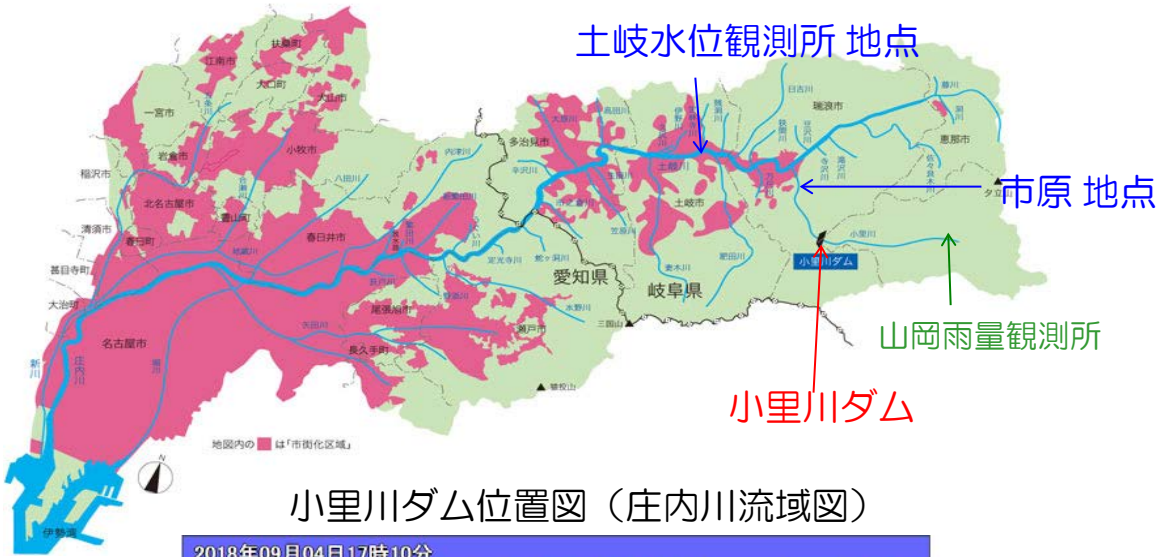
平成30年9月4日から5日にかけての台風21号による洪水のため、小里川ダムでは、4日17時から18時までの1時間に25mmの降雨がありました(総雨量:山岡雨量観測所162mm)。また、下流の瑞浪市ではこの間に、1時間に16mmの降雨を観測しました。この雨に対し、小里川ダムでは、最大で毎秒66 m^3/s の洪水を調節し、ダム下流の瑞浪市市原地点(国道19号小里川橋付近)で最大13cmの水位を低下し、土岐水位観測所地点で最大17cmの水位を低下できたと推測しています。

洪水調節図 (速報値)



※本資料の数値等は、速報値です。今後の調査により変わる可能性があります。

～小里川ダムでの防災操作による河川水位の低減効果～（参考資料）



9月4日17時10分レーダー画像(雨量)

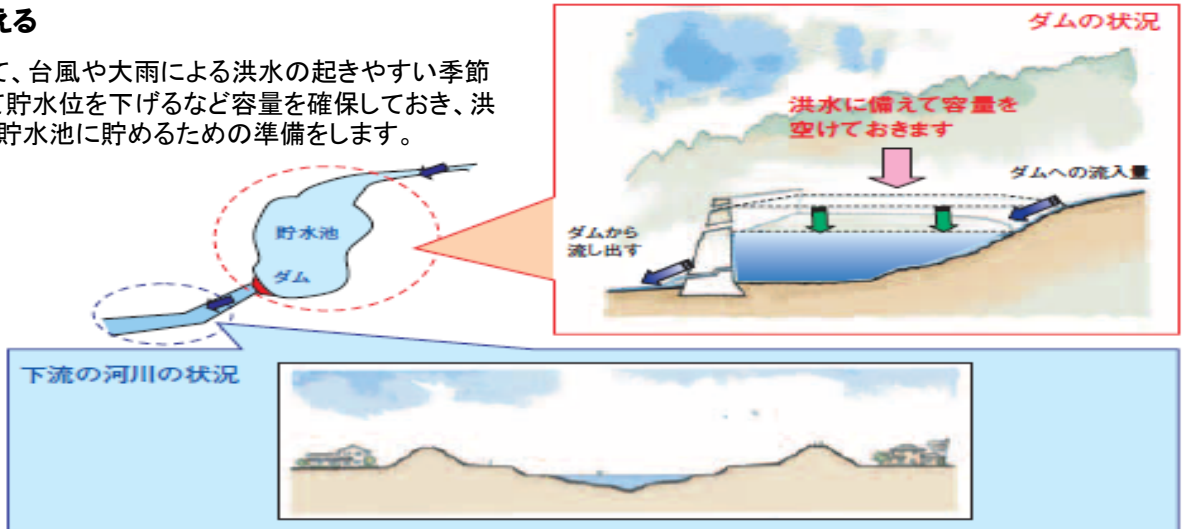


9月5日9時00分ごろの放流のようす

(参考)防災操作の仕組み

①洪水に備える

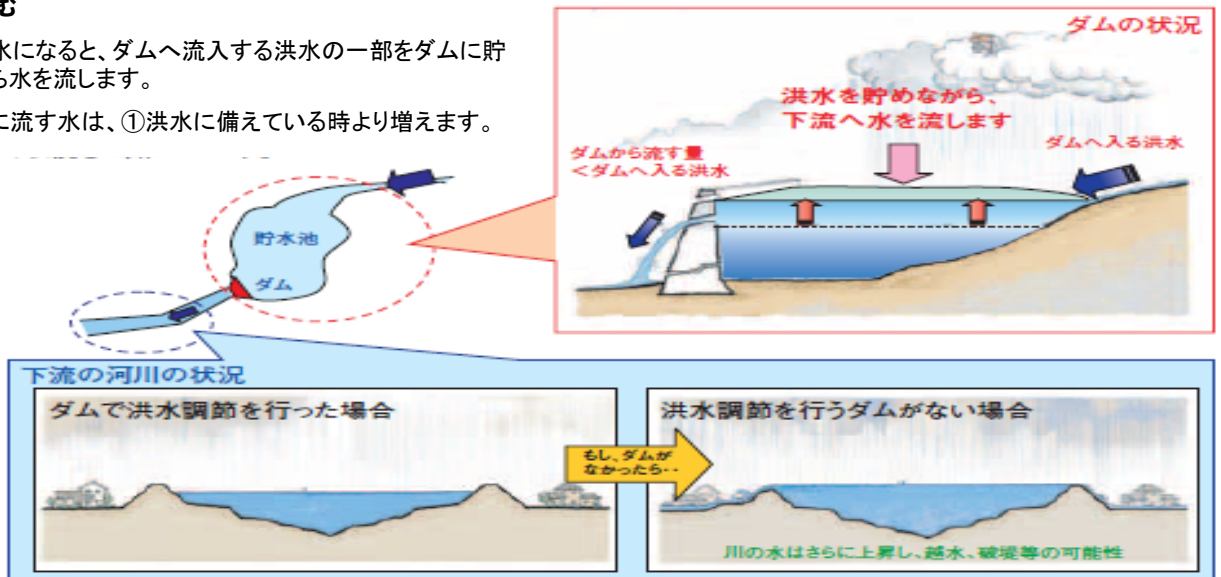
洪水に備えて、台風や大雨による洪水の起きやすい季節には、前もって貯水位を下げるなど容量を確保しておき、洪水の水をダム貯水池に貯めるための準備をします。



②洪水を貯め込む

大雨が降り洪水になると、ダムへ流入する洪水の一部をダムに貯めつつ、ダムから水を流します。

ダムから下流に流す水は、①洪水に備えている時より増えます。



③計画規模を超える洪水への対応

異常な豪雨により、計画よりも大きい量の洪水がダム貯水池へ流れ込むことがあります。ダムでは②のように洪水を貯めつつ下流へ流す操作を行いますが、ダムに貯めることができる水量には限界があります。

このような場合には、下流に流す量を徐々に増加させ、貯水池に入ってくる水量と同じ量を下流に流すよう(自然河川状態)にします。

